

大分県立芸術緑丘高等学校の歴史

学校の歴史を正しく知ることは大切だと考え、学校史の概略をまとめてみました。

現在大分市上野丘東にある県立芸術緑丘高校は、創立の場所は別府であった。

別府に芸術の高校を創ろうという構想は、終戦後朝鮮から引き揚げ別府市長となった脇鉄一が推し進めたものである。その背景には大正期に彫塑家朝倉文夫が兄の渡辺長男の協力を得て「別府に芸術の学校を」という運動を起こしながらも実現できなかったという歴史があり、そのことを記憶していた人々の思いが脇市長のもとで結実したということになる。脇は当時日出高等学校長であった縣五六に相談し、県や文部省の認可をとりつけ縣を初代校長として、音楽・美術のコースを持つ高校である県立別府第二高校の創設を成し遂げたのである。

昭和 21 年(1946)に始まった学制改革の一環として、23 年に全国で一斉に新制高校が発足したが、県立別府第二高校の創設もその流れに乗ってのものであった。音楽・美術以外にも外国語課程が併設され、校舎は旧別府高等女学校の校舎が使われた。バリトン歌手立川清登は、19 歳で津久見第二中学校教師として赴任していたものの音楽科の高校ができることを知り、居ても立ってもいられず 3 ヶ月で教師を辞し、音楽科 3 年生として入学している。昭和 24 年 3 月の最初の卒業生 17 名の中に、立川の名も拾える筈である。立川はその後東京藝術大学に進学しプロの音楽家となっていくのだが、この学校の創設がなければ彼をその道に駆り立てることはなかったのかも知れない。

昭和 24 年には、商業と家庭の職業課程を置くことになり、別府第二高校は一気に大規模校へと転身していった。この商業科が一つの受け皿となりスポーツも盛んとなるなか野球部の創部・活躍もあって、後にプロ野球で名声をほしいままにする河村久文や稲生和久を輩出することになる。昭和 25 年には美術課程に竹材工芸科を新設し、後に人間国宝に指定される生野秋平（祥雲斎）も教師として招かれている。一方、外国語課程は昭和 26 年 3 月に廃止が決まり、昭和 28 年 3 月に最後の卒業生を送り 5 年間という短い歴史を閉じた。そしてその 28 年 4 月に県立別府緑丘高校と改称されるのである。

この後、実業系へ傾きかけていた本校の舵を戻し、芸術系の高校として発展させたのが足達益三である。その道は高大一貫校への指向であった。足達は昭和 32 年校長として赴任し、高校では異例の専攻科を音美両課程の上に創って短大昇格への足掛かりとし、昭和 35 年 3 月に家庭科を、また翌年の 3 月には商業科を廃止して普通科に替えた。そしてその 4 月に大分県立芸術短期大学を開き専攻科を短大に移管させたのである。家庭科および商業科の最後の卒業生がそれぞれ 37 年・38 年の 3 月に巣立っていき、昭和 40 年 4 月には県立芸術短期大学附属緑丘高校と改称された。

家庭科・商業科の後に設置された普通科も昭和 44 年 3 月に廃止の決定がなされ、昭和 46 年 3 月の卒業生が最後となった。これにより緑丘高校は音楽・美術だけの芸術専門高校として歩いていくことになる。昭和 55 年には、先に大分に移転していた短期大学の後を追って現在地に移転している。そして平成 18 年に、短大の独立法人化を受けて短大からは独立し、県立芸術緑丘高校と名称が変更されたのである。